

明日香の雪

わが里に 大雪降りり

大原の 古りにし里に 落らまくは後

(卷二——一〇三)

この歌は、天武天皇が藤原夫人に、

「わが飛鳥の里には大雪が降っている。

お前のいる大原の古びた里に降るのは、

もつとあとだろうね」とひやかすよう

によんだ歌です。これに対して、藤原

夫人は次のように答えています。

わが岡の 霏おかみに言ひて 落らしめし雪の 摧くだけし 其処そこに散りけむ

(卷二——一〇四)

「いえそうではありません。この里の

竜神に言いつけて降らせた雪のかけら

が、そちらにちらついたのでしよう」

と、その雪はわが土地の竜神の威徳の

おこぼれに過ぎない、とやり返してい

ます。天皇とその妃との間に交わされ



雪の万葉文化館

た歌ですが、子どものような主張にも
みえて、なんだか微笑ましく感じます。

万葉集の最終歌(卷二十一—四五一—六)

にもあるとおり、積雪は豊年の瑞兆と

考えられていました。そこで、大雪が

降ることが土地のほめ言葉としてよま

れたようです。

「古りにし里」とは、都に対して田

舎をあらわす表現です。「わが里」と

は天武天皇の居所であった飛鳥浄御原

宮(現在の明日香村大字岡)のことで

しょうが、雪の降りようさえ異なると

擲つ掬くされた田舎びた「大原の里」とは、
いったいどこなのでしょうか。

ご存じの方も多いでしょうが、万葉

歌の「大原」とは現在の明日香村大字

小原のことです。藤原鎌足誕生の伝承

地であり、その母である大伴夫人の墓

とされる円墳などもあります。飛鳥浄

御原宮は飛鳥寺の南、大原は同寺の東

に位置し、目と鼻の先にあたります。

実際に降雪の多寡たかがあつたとは考えに

くい、ほんのわずかな距離です。

いま、万葉文化館を挟むように小原

の集落と飛鳥浄御原宮跡があります。

ぜひ冬の明日香を訪れ、その距離感と

雪の多寡たかをご自分の体で確かめてみて

ください。

一三〇〇年以上も昔の人々のことば

をたよりに、かつて彼らも踏んだであ

ろう土を踏み、その姿に思いを馳せる。

それができるのも、明日香の万葉歌な

らではの魅力ではないかと思えます。

(万葉古代学研究所主任研究員・井上さやか)